

報告書

社会の変動を見据えた教育の目的と手法

【第一部】

教育における不易流行と

教育の最先端の動き

～5年後の学校の在り方とは？～

令和5年12月28日

日本先進教育研究ラボ

(調査目的)

明治国家の誕生以来、知識詰め込み型の画一的な教育が行われ、日本社会には「正解主義」が蔓延するようになった。

しかし、時を経た今、日本社会は数々の前例のない課題に直面し、従来の延長線上に「正解」を見出しにくく、自らが「課題」「問い」を立て、解決する方が求められている。また、ICTやAI技術の進展や様々な地球規模の問題の深刻化、それに伴うグローバル化の進展は「世界のどこでも、誰とでも働ける人材の養成」が急務となっている。

公明党神戸市市議団では、令和3年度／令和4年度の政務調査事業において神戸市の魅力を高めるため「子供達の教育」はどうあるべきか、そのための教育インフラはどのように充実させるべきかを調査研究してきた。神戸の子供たちにこれからどのような教育を提供すべきか、そのためにはどのような教育インフラを整えるべきか。これまでの知見・ネットワークを活かし、さらに今後の文部科学行政の方向性も見据えながら提言をまとめていく。

このテーマに沿って、今後上記の三部に亘って調査報告を行うものとする

第一部では、「質の低下」が取りざたされている現下の学校教育の中で注目すべき先進的な教育を行っている学校についてのケーススタディを行う。国公立／私立の事例調査、また先進的な教育を提供している教師／校長／教育関係者のインタビューからそのエッセンスを抽出し、「不変な要素」と「革新的な要素」をどうベストミックスさせるのか、その課題をどう乗り越えたかを取材。さらに、行政の役割と実現に向けた取り組みを抽出していく。

業務の名称：社会の変動を見据えた教育の目的と手法

第一部：教育における不易流行と教育の最先端の動き 5年後の学校の在り方とは？

第二部：2030年SDGs達成年度以降の学校とは？

第三部：2045年人工知能のシンギュラリティ時代の学校とは？

【調査の目的】

1. 教育における不易流行とは？
2. 現代における最先端の教育とは？
3. 教育の最先端の動き：授業・教師編
4. 教育の最先端の動き：グローバル教育編
5. 教育の最先端の動き：入試選抜編

第1章 教育における不易流行とは？

「第1章 教育における不易流行とは？」では教育分野における「不易（ふえき）」と「流行（りゅうこう）」についてさまざまな視点から明らかにしていき、急速に変化する社会に対応する新たな学校を作る際に時代時代のニーズに適応しながらも、普遍的な価値を失わないようにするバランスを取るための指針としてインタビュー内容を中心にまとめさせていただきました。

不易と流行という言葉は、それぞれ「変わらないもの（不易）」と「変わりゆくもの（流行）」を表し、この二つのバランスが重要であるとされています。

不易は、永続性や普遍性を持つ要素を指します。それは文化や伝統、倫理観、人間性、自然の法則といった、時間が経っても変わらない価値や真理を表すことが多く、人間の基本的な道徳や倫理、美の原理、科学の基礎理論などがここに含まれます。

一方で流行は、時代や環境、社会の変化によって形を変えるものです。流行はファッション、音楽、アートスタイル、テクノロジーや市場の嗜好に見ることができ、新しい思想や形式が常に生まれ、消えていくプロセスを含みます。

不易と流行の概念は、それぞれが独立して存在するのではなく、相互に影響を及ぼし合いながら発展していくものです。不易な価値や理念があるからこそ、新しい流行が生まれ、それが過去の枠を超えて新しい意味を生み出すことがあります。逆に流行があるからこそ、不易なものの価値が再認識され、現代にも適応される形で受け継がれていきます。

教育における「不易」と「流行」

(不易)
時間を超越した
普遍的な教育の価値や目標

(流行)
時代や社会の変化に
応じた教育内容や方法

1. 教育における不易流行とは？

教育における不易流行とは？

教育分野における「不易」と「流行」は、時間を超越した普遍的な教育の価値や目標（不易）と、時代や社会の変化に応じた教育内容や方法（流行）のバランスの取り方を指します。

教育で最も重要なのは、不易と流行の間の適切なバランスを見つけることです。知識獲得、倫理観、人格形成といった時代を超越する教育の価値（不易）を維持しつつ、ICTの活用、STEAM教育や探求学習の推進、プログラミングやデータサイエンス、AIといった現代のニーズに応じた教育方法や内容（流行）を取り入れることが求められます。

このバランスが、生徒たちが過去の知恵を学びつつ、未来に向けて変化する世界に対応できるようにするための鍵となります。教育者は、このバランスを常に考慮し、時代に合った教育を提供することが重要です。

次に教育の「教育における不易流行と教育の最先端の動き：5年後の学校の在り方とは？」について3名の立場の違う教育に携わっている識者にインタビューをしました内容をお伝えします。

1. 本間勇人（聖パウロ学園高等学校元校長、21世紀型教育機構事務局）

教育における不易流行とは、生徒一人一人が基礎学力である学力の3要素（非認知能力も含まれる）を十分に身に着け、その過程でそれぞれに持っている才能を開発する教育を形成することであり、その才能が生徒自身のどう生きるかという道につながる本質を立ち上げその都度本質を問い続ける教育です。

そして、その開発したそれぞれの才能の多様性ある生徒同士が協力し、問い合うことによってより良き社会と世界を作り上げるソフトパワーを生み出す主体的・対話的で深い学びを形成することになります。

教育の最先端とは、つねにこの才能を引き出し、生きる道を開くために、効果的な最先端の学びのツールと国内外の創造的才能者と協働するプロジェクト学習のプログラムをデザイン及びそれをファシリテートする教師の育成を持続可能にする組織開発と人材開発をすることです。

明治以降、産業技術の革新によって社会は変わってきました。軽工業、重化学工業という工業社会、情報化社会と変容し、今やソサイエティ5.0の社会を迎えています。IoT（Internet of Things：モノのインターネット）やAI（人工知能）などの先端技術を活用して、サイバー空間とフィジカル空間の融合を実現し、必要なときに必要な情報やサービスが提供される社会が訪れています。

このような社会の変化に対応するように、教育もその時代の産業の革新技術を取り入れ最先端の教育を実施してきました。しかし、それは、その時代その時代の社会をより良き世界にしようという知恵を養うという生き方教育という意味で不易であり、この変わらない教育の使命とその使命を時代の

1. 教育における不易流行とは？

精神の要請にチューニングして教育のアップデートをしてきたプロセスを教育の不易流行というのです。

ソサイエティ5.0で、なぜそのような技術革新が必要であるかという、日本や世界が抱えるさまざまな課題が世界同時的に認識されるに至っているからです。たとえば、先進諸国の人口問題である。少子高齢化に伴う人手不足や社会コストの限界という問題があります。一方で、世界の人口増による食料の増産やロスの削減の問題があります。また、気候変動による災害を回避するために、温室効果ガスの排出の削減をいかにするかの問題があります。さらに貧困格差やそれに伴う地政学的リスクの問題があります。富の再配分や地域間の格差是正などの課題があるので、これらの課題を包括的に解決すべく国連はSDGsを定めていますが、それはソサイエティ5.0の果たすべき使命にも関連しています。

これらの世界のマクロの問題は、同時に学校現場のミクロの問題と無縁ではない。いじめや不登校の問題、学力格差の問題、家庭環境の格差の問題など、世界の多様なリスクへの社会の不安が学校や家庭にも影響を及ぼし、その不安を解決できる生徒とそうでない生徒の格差という現代的教育課題が浮上してきています。

5年後の学校は、このようなグローバルな問題と学校現場というローカルな問題の両方を解決するためのソサイエティ5.0の確立とSDGs達成に向けて、教師と生徒がどう立ち臨むかが問われます。不易の部分として学力の3要素をベースにグローバルな視野とイノベティブでクリエイティブなスキルと人類に平和をもたらすマインドとそのような社会をデザインするスキル、ウェルビーイングを生成できるスキルを学ぶ教育課程が再構築されることとなります。

具体的には、CEFR基準で、すべての生徒が高校卒業時にB2（英検準1級レベル）に到達し、世界の大学で学べる言語能力と思考力を身につけるプログラムが実行されます。生成AIとDXが促進され、生徒自らが先端技術の研究開発や実証実験に参加する高大連携プログラムが実施されています。ウェルビーイングの達成として、身体の健康、心の健康、人間関係の健康を持続可能にするAI支援ロボットが各学校に配置されたりメタバース上で活用することができるようになり、人間関係構築と社会貢献へのケアという精神と行動を生成するプロジェクトベース型の学びが浸透しています。

1. 教育における不易流行とは？

教育における不易流行は、
基礎学力と非認知能力の育成と
生徒の才能開発を核とし、社会貢献へ導く教育です。
これは、時間と共に変化する**社会需求**に対応しながら、
教育の本質—生徒の生き方を考える基盤—
を維持することを目指す。



本間勇人 聖パウロ学園高等学校元校長・21世紀型教育研究所事務局

中央大学法学部・同大学院を経て、日能研で授業・テスト・評価開発に従事。
99年からNTS教育研究所設立主宰。2000年から07年までHonda「発見・体験学習」の
プログラム開発。本間教育研究所代表。「21世紀型教育機構」の事務局及び「PBL・思考力テ
スト・評価」の開発。
聖パウロ学院高等学校元校長。開智国際大学客員教授。
著書に『名門中学の作り方』(2008,学研新書)、『創造的才能教育』共著[放送大学教授]編
(1997,玉川大学出版)、雑誌:「できる子は10歳までに作られる」創刊1号・2号・3号
(2008~)、「週刊ダイヤモンド別冊(2007)」、ブログ「ホンモノオト」、その他

2. 石坂康倫（石坂教育研究オフィス代表、日比谷高校元校長）

教育における不易と流行について考える上で必要なことを最後に述べさせていただきます。それはその教育に関わる人全てが哲学をすることです。哲学をする目的は、その時その時の背景をもとにしながらも、哲学の目的としている不易な部分である流行を追求するということです。そのために私たちは生き方を学ぶのであり、よく生きるための方法として哲学対話をしながら哲学をすることによって考えるということと行動するというを身に付けていくのです。普段哲学と言うと非常に硬く、また難しいというイメージがありますが、本来の意味は今お話ししたようによく生きるためにしっかりと考えて自分の意見を伝え、他者の意見を受け入れるようにしっかりと聞き、対話という手段から自分の知らなかった考えと考え方を学ぶことで想定外のことに對する対応力が身に付きます。

また、真理を探究するために考えることと考え方を学ぶことも哲学なのだと考えられます。教育に携わるものだけではなく、すべてのものが自己の哲学をしっかりと持って生きていくことが不易なことを変わることなく、守り続けることにつながる。すなわちよく生きるということにつながるのです。どうか哲学をする、哲学を持つということを根幹において、物事を考えていってもらえれば、良い方向性が見つかるのではないのでしょうか。

不易と流行という言葉はよく聞く言葉です。しかしながら、それは教育の世界でよく使われる言葉なので、教育関係者以外の人にとってはそれほど耳にすることもないかもしれませんし、使うことも

1. 教育における不易流行とは？

それほどないかもしれませんが、不易とはそのまま読めば、“容易ではない”ということになります。容易ではないということは、簡単に変わるようなものではないとも考えられます。一方、流行とは“行くに流れる”と読み取れば、その時々嗜好によって場合によってはいとも簡単に変わってくるものであると考えられます。つまり川のようなものではないでしょうか。源流は、それほどの水量は無いように見えますが、やがてその水量が溜まってくると大きな流れに変わっていきます。そしてそれがさらに溜まっていくと大きな川となってゆうゆうと流れることになります。一般的に川は高いところから低い所へと流れるので、わかりやすく言えば、山の上から海まで流れると考えて良いと思います。しかしながらこれはいつまでも続くものではありません。もしも源流が止まってしまえば川は淀んでしまい、流れもやがて止まります。

そして太陽の光によって川の水は蒸発していきます。水がなくなるということはやがて川は干からびてしまうということです。川を頼りにしていた生き物は住めなくなります。特に魚類は致命的ではないでしょうか。つまり川は永遠に流れ続けるように思いがちですが、いつ何時流れが止まり、生き生きとしていた生き物さえ滅びてしまうことだってあるのです。そのことはアフリカや雨量の少ない砂漠地帯では歴然としていることです。水が溜まって池になったり、あるいは湖のように大きなため池にもなります。それでも、雨が降らずに日照りが続けば、やがては枯れ果ててしまいます。つまり川は不易ではなくて流行だと考えるのが妥当だと思います。

教育における不易と流行の話をする前に自分なりのイメージを立ててみると以上の通りになります。もう少し身近な話をしたいと思います。私は食べ物に関してとても凝り性なところがあります。自分でも非常に不思議に思っているのですが、一度ぶどうを食べておいしいと思うと、そのぶどうにこだわり続け、その品種のぶどうがなかったとしても日課のように毎日ぶどうを食べます。しかし必ずと言っていいほどそのだわりはなくなっていき、全くとって良いほどぶどうを食べたくなくなります。ふとグレープフルーツを購入して食べてみたらおいしかったとなると、毎日のようにグレープフルーツを買ってきては食べていました。他にもいろいろあります。例えば食後に決まったアイスクリームを食べないと落ち着かないのです。そしてどうしてもそれが自分にとって食べたいものなのです。最近で言えばヨーグルトがあります。決まったヨーグルトをずっと食べていました。でもある日、突然食べたくなくなってしまふと、ほとんどそのヨーグルトは食べたいとは思わなくなってしまいます。私にとってこれはある種の流行のように思います。食べ過ぎて飽きてしまったとも考えられますが、毎日お米を炊いていただくご飯に飽きることはありません。私にとってこれは不易な食べ物であると思います。その理由は時分でもよくわかりませんが、理由をこじつけるとすれば自分の味覚や心の動きが変わってきてしまう食べ物が流行であり、味覚や心の動きが変わらない食べ物が不易だと考えて良いのではないかと考えています。

しかしあくまでもこれは個人的なものですから、教育的な流行とイコールだと言うには無理があるかもしれませんが考えるヒントにはなると思います。一方不易だと思うものがあります。私は好きな

1. 教育における不易流行とは？

色があります。もう既に50年以上もその色が大好きです。それはピンク色です。と言っても、サーモンピンクのような色はあまり好みませんし、ショッキングピンクと呼ばれるような濃いピンク色は好まないのです。不思議にいつも同じようなピンク色のものを好んでしまいます。コスモスのピンク色が好きです。桜も好きですがソメイヨシノはやや色が薄いのですが、たくさん咲いていると美しいと感じます。これも全く理由が分かりませんが、私にとっては不易なものとなっています。つまり不易とはやはり容易く変わることがないものを使うのだと考えて良いのではないのでしょうか。以上のことが私の話の前提になりますが、いよいよ直球で教育における不易と流行のお話をしたいと思います。

不易とは変わることのないものと考えて良いというのが一般的な考え方だと思います。しかしながら、日本においても、旧石器時代→縄文時代→弥生時代→古墳時代→飛鳥時代→奈良時代→平安時代→鎌倉時代→南北朝時代→室町時代→戦国時代→安土桃山時代→江戸時代→明治時代→大正時代→昭和時代→平成時代→令和時代と移り変わってきました。時代ごとに文化が変わる、食べ物が変わる、衣類が変わってきました。そのように生活様式は明らかに変わってきました。言葉ができて意思疎通が取りやすくなり、文字を発明して書くことによって表現をして理解しあうことが起こってきましたし、後世に自分が生きた時代の有様を伝える知恵も手にしてきました。このような営みは不易なことなのでしょうか、それとも流行なのでしょうか。

つまり人がコミュニケーションを取りながら、その時代時代に沿った考え方を持つということは、一般的なやりすたりのある流行とは確実に異なります。つまり、自分たちの生活や自分たちが生きていく上で必要なものだから、安易に変えることはしないほうが良いものだと考えられます。そのように考えると、時代が変わっても生活様式が変わっても、たとえ価値観が変わっても変わらないものがあるとすれば、すなわちそれが不易なのだとは私は思います。だから、教育においても、どのようなことが起こっても変わることのないものを求めていった究極的なものが不易なものだと考えて良いと思います。私たちはこの世に誕生して死ぬまで、毎日生き続けるという事実があります。生き続ける中で私たちは何のために生きるかということを考えます。勿論、自分のために生きる、家族のために生きる、その他困った人のために自分の人生を捧げる、などいろいろと考えます。このことは、人が持つ本能的なものでもあります。そういう意味では至って人間は動物的です。自分の保身、他者への愛情なども不易なものだと考えて良いのではないのでしょうか。その他に、他者を恨む、他者を憎む、他者を妬むなども不易なものかもしれません。

しかし、その不易なものは人によって異なる場合があります。それでも、教育においては、そのようなものを大事にするということが教育の根幹をなしているのではないのでしょうか。もしこれを哲学的に言うならば「よく生きる」ということにつながると思います。よく生きるために行う考え方や行為は全て不易なものだと考えて良いと思います。とてもわかりづらいのですが、抽象的にならざるを得ないのは、不易とは具体的にこれだと決めつけることができないものでもあるからです。容易にはかえてはいけないものがあるとすれば何なのか明確になれば、不易とは「これこれである」と具体的に

1. 教育における不易流行とは？

示すことができますが、実際にはそれを言い切るのはとても難しいのです。変わってはいけないもの。これが不易だと言っているのですから、ここに書かれている文章を読む人にとってはわかりにくいのは仕方ないと思います。

でもそれを教育において行うわけですから、当然それを理解し、そしてその不易な部分を大切にするような精神を保ち続けられるようにするために行われるのが本来の教育の持つ意義だと思います。再度言いますが、教育における不易とは「よく生きる」ために変えてはいけないと普遍的に断言できるものです。

次に流行についてお話をします。わかりやすく言うならば、第二次世界大戦の戦前・戦中、そして戦後の世の中の流れを理解すれば答えは出ます。教育の中で戦前は自由でした。英語も学べましたし、外国のものを輸入あるいは日本のものを輸出することが可能でした。つまり経済の流通や文化や宗教の自由が促進され、それらは海外との交流の中に存在していました。

しかしひとたび戦争が勃発すると世の中は一変してしまいました。英語を話してはいけない。外国の真似はしてはいけない。他宗教を受け入れてはいけないという考え方が徹底されます。そして教育勅語と呼ばれるようなものが生まれ、それに基づいて国家主義的な教育がなされ、国を愛することが第一と考えられました。お国のためなら命をも投げ打つことができると考えました。

それは、後に母国愛ではなくて、国家のために人が存在しているという考え方です。つまり個人の自由は束縛されて、国家のための一生き物としての人間が形作られていきます。そして怖いことに、その考え方が当然であるかのように思い、また信じて、戦地に出向き、戦死するのもすべてはお国のためという考え方をすることが、最高の喜びだと感じられるような異常な心理状態を作り上げてしまいます。

しかしながら、本音を言うならばそんなことはないことは皆分かっていたのではないのでしょうか。その本音の部分、つまり不易な部分をすべて捨て去られ、愛情さえも国家のもとにあるという考え方が徹底されてしまったのです。敗戦国となって戦争が終わり、悔しさと失望で涙したものの、その理由は命さえささげた戦争に負けた悲しみからくる喪失感に違いなかったのではないかと思います。それでも、戦争が終わったことで、皆はある種の自由を獲得します。でも、失望のどん底にいた人々は、我は我はという考え方が噴出してしまいます。所謂、自分が第一優先であるという利己的な考え方です。

しかしながら、それは生き残るための一つの手段にもなっていたのは事実だと思います。特に、終戦直後から在留していたアメリカ人との交流が盛んになり、英語を学び、アメリカ文化を吸収するようになっていきます。そして、不易と考えられていた国の根幹であった大日本帝国憲法は新しい日本国憲法へと変わっていきます。日本国憲法は、日本人が自由に考えた結果に生まれた法ではないにしても、この憲法が今では日本の不易である根幹となっています。教育はその憲法のもとに成り立っています。それが、教育基本法であり、そのもとに学校教育法があり、学校教育法施行規則などが作られているのです。でも、そのおかげで日本の教育は非常に発展的な進化を遂げています。文字を書け

1. 教育における不易流行とは？

る、文字が読めることはそれまでと大きくは変わらないものの、英語が話せる、英語が書けるというように英語に特化したような教育も重視されてくるわけです。

そのように考えると不易なものも普遍的なものであるとは言い切れないということになるわけです。だからこそ、不易を如何に考えるかが教育の在り方の鍵を握るのです。戦後は、貧富の差は激しくなります。それまで貴族であったものが必ずしも裕福であるとは限りません。つまり経済面での成功者が富を得ることになりました。そこに、どうすれば経済的に豊かになれるのかという一種の流行的な考え方が生まれてくるのです。それが、物資の流通の仕方をいち早く取り入れることができた経済的成功者になり、その方法を知った人たちが次々に現れて成功を手にする一種の流行による産物だと考えて良いと思います。ここに、不易が普遍的とは限らないことが明らかになります。しかし、不易をその時代の普遍的なものに据えて考え付いた流行が世の中を豊かにしたのは紛れもない事実です。

したがって、不易には二種類あることが分かります。一つは、時代がどのように変遷して言っても永遠に変わることはないもの、例えば精神的なものとしての本音の心です。「よく生きる」ことです。もう一つは時代や背景によって定着する価値のことです。これは、時として変わり得るその時の根幹をなす地盤です。例えば、私立学校で言うなら「建学の精神」です。以上のことから分かるように、流行はその二種類のどちらかがあるからこそ生まれる時流だと考えられます。流行にも二種類あります。一つ目は今話した通り、時流に合わせた流行です。例えば、学校教育で言えば学習指導要領です。もう一つは嗜好によるものです。例えば、今年の女性のファッションはロングドレス、男性のファッションはツーブロックの髪型というようなものです。

今では日本においては、不易と流行が調和しているために、平和な社会が築かれたと言っても過言ではないと思います。日本ほど悲惨な戦争から短期間で復興した国は他にはないと言われているのは日本の真面目さが物を言っているのだと私は考えています。この真面目さも不易なものになります。日本人はこれまでの教育を通して、そのような力を備えてきたのです。その力も不易な部分なのです。そして不易な部分が日本時の中に考え方の根本にあったからこそ、時代の流れに沿った流行を上手に取り入れて、自分たちの生活を豊かにしていったのではないかと考えていますし、そのような日本人が多く誕生したのには、日本の教育のあり方があったのは事実だと考えて良いと思います。

今はAIが進化し、人間にとって変わるような時代になったという恐怖心を持たれる方が非常に多いように思いますが、AI技術が如何に進化しても、AIが人間になることはありません。見た目や行動や考え方が情報入力されることによって人間以上の働きをすることは考えられますし、今となってはそれほど不思議なことではありませんが、人間になることはありません。むしろ、人とのコミュニケーションが苦手な人にとっては救いの神になることは十分にあり得ることだと思えます。今や、流行はそこまで来ています。そして、その結果、AIの進化によって「よく生きる」ことが可能になれば、正に不易と流行の最たるものとして歓迎すべきだと私は考えています。AIは明らかに流行なのです。

私たちが便利に過ごせるために、そして長寿な国を作るために必要な1つのツールだと考えて何ら問題はありません。具体的に言えば、医療の開発がAIの技術によって発展し進化していけば、命に関

1. 教育における不易流行とは？

わるようなことであっても、AIの技術によってその命を助けることができるだけでなく、復活して生き生きとした人生を歩み続けることも可能になるわけです。これは流行ではありませんが、人間が本来持っている不易な部分を守り抜こうとすることを流行によって実現可能になります。学校教育においても不易と流行の結合を駆使しながら、不易と流行が教育の中で問われているように思います。仮に一時の流行が終わったとしても、次にまた新たな流行は来るわけですから、不易な部分はより確固たるものになります。すなわち不易が壊れそうになっても、流行によって手術され、その手術結果によって不易は保たれるということになるのです。だから学校教育においては流行を取り入れることが自然になって来ます。それは全て不易なことを不易なものとして大切にすることが必要だからです。そして、人間の中に不易なものが備わっているからこそ、AI技術などの流行が発展・進化していくのだと思います。

ここで、インターネットで調べてみた不易と流行について消化させていただいておきます。併せて、文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会が示している国の教育における利益と流行の説明をさせていただきます。

中央教育審議会

(3) 今後における教育の在り方の基本的な方向

我々は、以上のような認識の下に、今後の教育の在り方について種々検討を行った。

教育においては、どんなに社会が変化しようとも、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」(不易)がある。

豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心など、こうしたものを子供たちに培うことは、いつの時代、どこの国の教育においても大切にされなければならないことである。

また、それぞれの国の教育において、子供たちにその国の言語、その国の歴史や伝統、文化などを学ばせ、これらを大切にすることをはぐくむことも、また時代を超えて大切にされなければならない。我が国においては、次代を担う子供たちに、美しい日本語をしっかりと身に付けさせること、我が国が形成されてきた歴史、我が国の先達が残してくれた芸術、文学、民話、伝承などを学ぶこと、そして、これらを大切にすることを培うとともに、現代に生かしていくことができるようにすることも、我々に課された重要な課題である。

我々はこれからの教育において、子供たち一人一人が、伸び伸びと自らの個性を存分に発揮しながら、こうした「時代を超えて変わらない価値のあるもの」をしっかりと身に付けていってほしいと考える。

しかし、また、教育は、同時に社会の変化に無関心であってはならない。「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」、(流行)に柔軟に対応していくこともまた、教育に課せられた課題である。

特に、(2)で述べたように、21世紀に向けて、急激に変化していくと考えられる社会の中にあって、これからの社会の変化を展望しつつ、教育について絶えずその在り方を見直し、改めるべきは勇

1. 教育における不易流行とは？

気を持って速やかに改めていくこと、とりわけ、人々の生活全般に大きな影響を与えるとともに、今後も一層進展すると予測される国際化や情報化などの社会の変化に教育が的確かつ迅速に対応していくことは、極めて重要な課題と言わなければならない。

このように、我々は、教育における「不易」と「流行」を十分に見極めつつ、子供たちの教育を進めていく必要があると考えるが、このことは、これからの時代を拓いていく人材の育成という視点から重要だというだけでなく、子供たちが、それぞれ将来、自己実現を図りながら、変化の激しいこれからの社会を生きていくために必要な資質や能力を身に付けていくという視点からも重要だと考える。

以上の通りです。

中央教育審議会は確かに理想的なことを言っています。それは当然のことです。国が理想的なことを示さなくては、人は頑張ろうという気にはなりません。よく教育の世界で文部科学省は勝手なことを言うけれども、そんな事はとてもできるものではないと言う人はたくさんいます。

しかし、不易の部分を守ろうとするがために流行を活用するのは、具体的には、それが学校教育を行うための基盤になる学習指導要領です。中でも、公立学校には建学の精神はありませんから、学校の存在基盤はありません。実は、その学校基盤が学習指導要領なのです。その中には、教科・科目だけではなく力を入れなければならない事柄が示されています。所謂公立学校のバイブルなのです。例えば今で言うならば、探求的な学習などは将来を見据えた大事な事柄として、きちんと別の文章としてまとめられています。全てを網羅することはとても簡単にはできるものではありませんが、国として文部科学省を通じて示されたものは決して間違ったものではありません。私たち教育に関わるものの役割は、そのことを日本の教育の理念として掲げながら、これまでの不易を守るために自分たちにも嘘をついてきた戦前、戦中、そして戦後を通じて、これまでには考えても見なかったはずであった自分自身への偽りや国による戦争洗脳は許されることではありません。

したがって戦争をしてはいけないのです。これは人間の尊厳を軽視するのみではなくて、「よく生きる」ことに対する最も悲惨な出来事なのです。だから私たちは戦争のない世の中を作り、貧困のない世の中を作るために学びをします。自分の幸せはもちろんのこと、他者の幸せも保証するために働けることができることがよく生きることであり、そのことこそが不易なことだと私は考えています。

典型的なものとして、私立学校では建学の精神があります。これがその学校の根幹をなす不易なものです。そのように考えて自由に合わせた教育を行っていきながら流行を活用しているということになるわけです。そしてその流行の活用の仕方によって不易である建学の精神が生かされるかどうかが決まってきます。不易なものは確固たるものでなければなりません。確固たるものがあれば、すべての人がよく生きられるような世界を作り上げることを可能にします。それは、不易を共有するからです。一方で、旧文部省・現文部科学省が言い続けていることがあります。それは学習指導要領のキーワードでもある「生きる力」の獲得です。つまりこれからどのような時代になってもどのような流行

1. 教育における不易流行とは？

が来ても生きる力こそあれば、戦争は起こらないと言うことを意味しているのだと私なりに捉えています。

生きる力に関する定義付けは、中央教育審議会は次のように示しています。
この前に掲載した(3)の続きです。

また、今日の変化の激しい社会にあって、いわゆる知識の陳腐化が早まり、学校時代に獲得した知識を大事に保持していれば済むということはもはや許されず、不断にリフレッシュすることが求められるようになっている。生涯学習時代の到来が叫ばれるようになったゆえんである。加えて、将来予測がなかなか明確につかない、先行き不透明な社会にあって、その時々状況を踏まえつつ、考えたり、判断する力が一層重要となっている。さらに、マルチメディアなど情報化が進展する中で、知識・情報にアクセスすることが容易となり、入手した知識・情報を使ってもっと価値ある新しいものを生み出す創造性が強く求められるようになっている。

このように考えるとき、我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を【生きる力】と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。

【生きる力】は、全人的な力であり、幅広く様々な観点から敷衍することができる。

まず、【生きる力】は、これからの変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる、人間としての実践的な力である。それは、紙の上だけの知識でなく、生きていくための「知恵」とも言うべきものであり、我々の文化や社会についての知識を基礎にしつつ、社会生活において実際に生かされるものでなければならない。

【生きる力】は、単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力である。これからの情報化の進展に伴ってますます必要になる、あふれる情報の中から、自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力などは、この【生きる力】の重要な要素である。

また、【生きる力】は、理性的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動する心といった柔らかな感性を含むものである。さらに、よい行いに感銘し、間違った行いを憎むといった正義感や公正さを重んじる心、生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観や、他人を思いやる心や優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心、ボランティアなど社会貢献の精神も、【生きる力】を形作る大切な柱である。

そして、健康や体力は、こうした資質や能力などを支える基盤として不可欠である。

このような【生きる力】を育てていくことが、これからの教育の在り方の基本的な方向とならなければならない。【生きる力】をはぐくむということは、社会の変化に適切に対応することが求められる

1. 教育における不易流行とは？

るとともに、自己実現のための学習ニーズが増大していく、いわゆる生涯学習社会において、特に重要な課題であるということができよう。

また、教育は、子供たちの「自分さがしの旅」を扶ける営みとも言える。教育において一人一人の個性をかけがえのないものとして尊重し、その伸長を図ることの重要性はこれまでも強調されてきたことであるが、今後、【生きる力】をはぐくんでいくためにも、こうした個性尊重の考え方は、一層推し進めていかなければならない。そして、その子ならではの個性的な資質を見だし、創造性等を積極的に伸ばしていく必要がある。こうした個性尊重の考え方に内在する自立心、自己抑制力、自己責任や自助の精神、さらには、他者との共生、異質なものへの寛容、社会との調和といった理念は、一層重視されなければならない。

今後、国際化がますます進展し、国際的な相互依存関係が一層深まっていく中で、子供たちにしっかりと【生きる力】をはぐくむためには、世界から信頼される、「国際社会に生きる日本人」を育てるということや、過去から連綿として受け継がれてきた我が国の文化や伝統を尊重する態度を育成していくことが、これまでも増して重要になってくると考えられる。

我々は、【生きる力】をこのようなものとして考えたところである。そして、【生きる力】をはぐくむに当たっては、特に次のような視点が重要と考える。

以上の通りです。

これもとても理想的ですが、当然のことです。この理想的な事柄を念頭に置きながら、私たちはどんな状況に置かれても、生きる力を身に付けていくことが一人ひとりの幸せにつながると思います。常に人を頼るような生き方をしていたのではいつまでたっても生きる力は身に付きません。一人ひとりが生きる力を持つということは、一人ひとりが幸せを求めることであり、その力があるからこそ対等な関係が保たれるのだと思います。その中には当然批判力もあります。批判力を有していないと不易が不安定になってしまうのです。だからこそ生きる力が必要なのです。実際には一人ひとり生き方は違います。小さな世界の中で生き抜く力を育んでいく人もいます。それでもその人はよく生きることが出来ます。

しかし問題があります。何かを起こそうとしたときに、その人たちには、想定外のことがたくさん起こってしまうと全くと言って判断することができないのです。それより以前にそのことを理解することさえできないということになります。それが知識であり、技術であり、そしてコミュニケーションであったりするわけです。英語が必要であると言われるのは世界規模で様々な国や地域の人々とコミュニケーションを取ることができるようになるためです。グローバル化された時代においては、もはや一つ国だけではよく生きる世界を構築することはできなくなってきたのです。自分の世界の中だけでとどまっていたのでは、自分自身は幸せだと思っていっても、他者を幸せにすることはできません。世界中の人々が良く生きることができてこそ、平和な世界が誕生し、真に国境や地域を超えたグローバルな世界が誕生するのです。だからこそ、今ではSDGsが世界的に共有されていることは救いだと言えるのです。私たちにとって想定内での考えと想定外に遭遇したときの対応と考えを居雄出来

1. 教育における不易流行とは？

ない限りどれほど素晴らしいことであっても受け入れることはできにくくなります。想定外のこともでも考えた思考コードをもつことで、想定外に身を置かれた時にも対応可能になります。

そのためには、どのように考えて判断するかという基盤になる知識と教養とそして感情や感懐うまでもが必要になります。その経験を何らかの形でしておかないと対応ができません。よく言われることですが、失敗は成功のもとという言葉がありますが、まさしくそうなのです。海外に行き通用しない英語を話し、それでもコミュニケーションを取るうとして、心が通じたときに世界は一つなんだ、人類は協力し合えるのだと実感できるのではないのでしょうか。そのことが大事なのです。今世界では悲惨な戦争が起こっています。その中でたくさんの犠牲者が出ています。犠牲者とは死者のことを言いますが、実際には死者以外の人も全て犠牲者になるのです。そのような世の中を作ってはいけません。これは不易に反する行為なのです。勿論、流行などと呼べるもので決してないのです。想定内でも想定外でもないのです。人間としてしてはいけないことをしてしまっているのです。もはや狂人としか思えませんし、実際には狂人とさえ言えないほどの怪物なのではないのでしょうか。そのことがまかり通る組織はやはり日本における第二次世界大戦と全く変わりはありません。二度と原子力爆弾が使われないようにするために、不易な部分としてよく生きるということを私たち人間がこの世に誕生して以来大事にしてきたことなのです。

よく“人に対して思いやりを持ちなさい”とか“人のことを考えなさい”とか、“人に迷惑をかけないようにしなさい”と多くの人が言われながら育ったのは、その根底に自分も他者もよく生きるために行われる親からのあるいは教員からのしつけであり教えてあるのです。礼儀作法もその一環です。何も単に形式的な礼儀作法を言っているのではありません。心から相手に敬意を表する気持ち、相手を大事に思う気持ちを相手の心に届くために行う行為が礼儀作法なのです。その礼儀作法が日本の繊細な気持ちを作り出します。そのために礼儀作法の知識と技法を学ぶのだと思います。そのことによってコミュニケーションはより円滑に行われるのです。

なぜなら、そこには信頼関係や相手に対する尊重が生まれるからです。それを具体的に行うのが学校教育だと私は考えています。今日本では中高一貫校が非常に評価されています。つまり6年間を通して、不易な部分として、特に大切な「よく生きる」ための知識から応用そして創造までもを育むことが可能になるからです。すべてのものが自分の考えを述べ、一人ひとりの良さを生かせるような世の中を作っていかなければ、いつまでたっても差別感はなくなりません。差別感を持っている限りは、人はよく生きることはできません。差別は不幸な人を生み出します。十人十色と言って人は皆異なります。その良さを引き出し、活用できる力を身に付けることが生きる力になり、中央教育審議会が示している通り協働の精神へと発展させるのが生きる力を身に付ける意味でもあるのです。

以上のことが理解できれば、AIの時代が到来することに恐れを抱くことはなく、また単なるマニアックな人がAI開発をしているのではなく、グローバルな世界を築くために力を尽くしているのだと考

1. 教育における不易流行とは？

えています。すべて人間がよく生きるために行われる進化した人間の流行を求めた結果が AI という進化した流行なのです。

以上、私が考える学校教育における不易と流行です。もしも、まだ中高一貫校を作っていない都道府県や市区町村があるならば、その地域の幸せと発展を願って勇気を出して作ってほしいと思います。その際の注意点はその学校のビジョンを明確にし、その根底には不易なものを取り入れておくことです。それさえできれば如何なる流行が起こって来ても活用の仕方さえしっかりとしていれば、中高一貫校は単なる流行ではなく、今後の学校教育の発展の途中段階としての学校の一つの姿であり、中高一貫校を成功裏に導くことによって、さらなる学校教育の進化を遂げていくと私は信じています。ぜひ私の考えを参考にいただき、教育における不易と流行、そして両者の連環の重要性を理解し、生きる力と言うキーワードを入れ込んだ時に、日本の教育革命はすべての人々がよく生きられる世界が実現できると考えています。これからの学校教育のあり方を真剣に考え駆動してくれる人々と組織が数多く誕生してくれることを願ってやみません。

教育の根底には、
変わらない「不易」な価値として
家族愛や人類愛などの愛情を持つこと
善く生きるための知識・技術の獲得があり
これらを保ちながらも、技術の進歩「流行」を
取り入れていく必要がある。



【全23回】(石坂康倫氏) 初任者が頑張り抜くための本気塾 エッセイまとめ
多くの先生方のお悩み解決として、学校現場を長くご経験し、初任者の先生方に寄り添ってこられた石坂康倫氏による初任者・若手先生向けのエッセイです。

石坂康倫 石坂教育研究オフィス代表

東京学芸大学卒業後、教職に就く。
東京都立狛江高等学校などで教鞭をとったあと、
2004年に東京都立桜修館中等教育学校の校長に就任。
その後、東京都立日比谷高等学校長、東洋大学京北中学高等学校長を経て現職。
現在、全国での講演や執筆活動、先生や保護者の相談をつづけながら、新しい評価軸や未来の教育についても研究を重ねている。

著書「日比谷高校は進化する」

3. 黒畑勝男 (関東学院六浦中学校・高等学校校長)

未来に備える教育を

AI の発達とチャット GPT の浸透が、2045 年に訪れると言われているシンギュラリティを危険をはらみながら前倒しにするような昨今。日本政府が提唱してきた Society5.0 は、「変わらないこと (不易)」が特徴の中で安全の確保がないまま、いびつに無防備に進んでいくようです。それを背景に日本の教育を眺めると、ますますガラパゴス化が進むようです。国際社会の先進的な教育では学校の

1. 教育における不易流行とは？

ICT化は過去の話題で、デジタル・シチズンシップの教育実践が日本より10年以上も先行しています。(流行)

それ以前の論点として、教育における「知」と「学び」の考え方に日本もやっと変容が起こり始めました。未来への備えの教育が間に合うのか、疑問が強く起こります。ICT化は、教育のあり方での国際化も加速させます。子どもたちの自己実現もこれまで以上に国際化の必要性が高まります。

入国管理法の改正は人材のレベル別化が明確に示されないまま進められてきました。日本はいま求人が活況です。しかし少子高齢化が進み、人口縮小で国内の経済活動は変化します。有能な労働者の獲得と企業の活動範囲がグローバル化します。日本の若者が日本に集まる国際人材と協働できるのかという疑問を抱かざるをえません。じわじわと進む国内外のグローバル化に対して、10、20年先に生きる子どもたちにはこれまでとはやや違った国際化の観点で、国際社会で渡り合える力をつけることが必要でしょう。

感受性が柔軟なうちに未来を眺める経験をし、主体性をもって必要な資質とアカデミック・スキルを身につける。教育とは未来に求められる力を育てること。ただし、教育と学びの根底の理念は、「隣人愛」を深く理解し平和を創る人を育てることです。変わらぬ真理(不易)に立ち、変わるもの(流行)への対応力をつける。関東学院六浦は、未来に繋がる教育に邁進します。

教育の不易は、「経験して気づくこと」
海外経験は内なる変化への経験。
日本では経験できない「非日常」の経験です。
少子化や予測も難しい社会の変動は「流行」で、
それに気づき、正解のない時代に対応するため
にも「不易」が重要です。



黒畑勝男 少子化の中、全てがグローバルでつながる時代の教育を探究

前任校の立命館慶祥では、2000年に開学した立命館アジア太平洋大学(APU)に有為な人材を送るという附属高校の使命を果たしました。APUのキャンパス内にある学生寮(APハウス)でResidence Assistant(RA、国際学生が暮らしを始める際に必要な支援をする学生)の育成に7年間関わり、日本にいながらにして国際色豊かな「多文化理解」を経験。

北星学園大学文学部卒業後、北海道立高等学校に教諭として着任。
道立高等学校退職後、とわの森三愛高等学校教諭、立命館慶祥中学校・高等学校教頭などを経て、2008年からとわの森三愛高等学校副校長に就任。
現関東学院六浦中学校・高等学校校長

————— インタビュー終了 —————

2. 現代における最先端の教育とは？

第2章 現代における最先端の教育とは？

「現代における最先端の教育とは？」では、公立と私立の中学校・高等学校の最先端の教育を知るお二人の先生方の取材による内容から現場の状況とそれぞれ視点をお伝えします。



横浜創英中学校・高等学校校長 工藤勇一 先生

公立学校でも私立学校でも、“学校の当たり前”を見直し、“自ら考える力”を育てる

2014年から6年間、千代田区立麴町中学校の校長として工藤勇一先生は、宿題廃止、定期テスト廃止、学年担任制、教えない授業の実現など、さまざまな学校改革を断行しました。それまで学校教育では“当たり前”だと思われていた常識を、次々と打ち破って見せたのです。工藤先生が実現したかったのは、主体的に考え行動する生徒を育てることでした。猛烈なスピードで科学技術が進展し、目まぐるしく変化していくグローバル社会を生き抜いていくためには、これまで以上に「自分で考え、判断し、決定し、行動できる力」（自律の力）が求められます。2020年4月に横浜創英中学校・高等

2. 現代における最先端の教育とは？

学校の校長として着任。「考えて行動できる人の育成」という建学の精神の下、「自律・対話・創造」をキーワードに、さまざまなチャレンジに取り組んでいます。

学校教育の目標とは何か

工藤校長：僕の頭の中には、現在の日本で考えられる学校教育の最終的なイメージはあります。それが実現できれば、現行の学習指導要領の問題点を指摘するひとつの事例を示すことになるでしょう。

今の日本の社会は、掲げた理想と現実のギャップを憂いて、みんなが不幸になっているのではない。その最大の原因は学校教育にあって、学校教育そのものが不幸になる仕組みをつくっているのではないのでしょうか。学校教育は何のためにあるのかという根源的、本質的な命題について、ただの一度も合意したことがない国。それが日本です。

教育基本法には立派な目標が書いてあります。理想の教育を実現するために、国民をきちんと学ばせなければいけない。いろいろなスキルや知識を身につけさせなければいけないと。

● 教育基本法第一条（教育の目的） 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

でも僕は、教育の最終的な目標は次のふたつのことに集約されると思っています。ひとつは、すべての子どもたち（障がいの有無に関わらず）は、人の力、社会の力を借りながら、自律の力によって、一人ひとりが wellbeing になるための教育。もうひとつは、個人の幸せは社会全体が幸せなことによって成り立つ。

社会の wellbeing ですよね。持続可能な社会を作るための学校教育です。

ウクライナ戦争が起きて、私たちはまさに世界が平和でなければ幸せがやってこないことを実感しています。

本来、学校はいろいろな人間がいることを体感しながら学ぶ場所です。日本は「こころの教育」を前提に多様な人間を受け入れようとしがちですが、僕はもっと大事なことがあると思っています。対立が起きた時に、こころの在りよう（感情）を超え、違いを超えて、みんなが OK という社会を築くためには、対話を通して学ばなければいけない。ウクライナ戦争を目の当たりにしている今、まさにふたつ目の目標がクローズアップされている時代だと思います。

学校はトラブル場所。

自ら考えて行動する、自律した子どもを育てる工藤校長：利害の対立や主張があっても、絶対に超えてはいけない一線のところで、対話によって合意する術を学ぶ。日常の子ども同士トラブルの解決の仕方が似ています。僕は基本的に校長室のドアを開けているので、放課後などに子どもたちが入ってくるのがよくあります。ある時、4人の中1男子が言い争いながら入ってきました。3対1の

2. 現代における最先端の教育とは？

構図で、お互いに「こんな酷いヤツなんです」と罵り合っているわけです。ネットゲームのトラブルが原因でした。

そこで僕は、「ひとつだけ質問していいかな。君たちはこれから先5年間、今の罵り合いをずっと続けたいの？」と。すると、4人とも「続けたくないです」と言う。「そこは一致したね。じゃあ、どう解決するかは、君たちが自分で決めることだよ」と。

こうした場合、教員が事情を聞いて良し悪しを整理し、「お互いに謝りなさい」と諭すのが、教育現場の一般的なやり方。その結果、「子どもたちはトラブルを解決するのは、仲裁してくれる先生（大人）の役割だと思っている」と、工藤校長は話します。誰かが止めて（解決して）くれるまで、いつまでも相手が悪いと言い募り、解決策を自分の頭で考えようとしません。保護者も同様で、最終的に仲裁に納得がいけないと、解決の仕方が悪いと先生や学校が責められるという悪しき構図です。

工藤校長：学校はそもそも人間関係がいつもぶつかり合う場所であるのが前提なのに、ぶつかり合っ
てはいけないと教えているわけです。大事なことは、トラブルになった時に子どもが自律的に解決で
きるような学びに変えていけるように大人が支援していくことです。

僕は、保護者の皆さんには、「学校はトラブりますよ、それが勉強だから」とはっきり伝えていま
す。「成績優秀な生徒を育てることも大事だけれど、うちの学校は、自分で考えて行動できる、そう
いう自律した子どもを育てたいので、そのつもりで覚悟して来てください」と。

その一方で、多様性を育てるために、違いを理解して尊重できる子どもを育てたいと思っていま
す。なかには、発達障害に近いパニックを起こす子どもや型にハマらないタイプの子どものもいます。
そうした子どもも排除しません。そういう最も本質的な根源的な教育を書き換える作業を行なって
います。同一性を重視する現行の教育システムは、そういった子どもには決して優しくないといいま
すね。

自ら学び方を選ぶ「教えない授業」を実践

前任校の麴町中学校は、かつて、「番町小→麴町中→日比谷高校→東京大学」と辿るのがエリート
コースの代名詞と言われた名門校です。しかし、いつしか有名私立校に「難関進学校」の地位を奪わ
れるようになってからは受験失敗組の生徒も多く、自己否定から精神的に不安を抱えた子どもも少
くありませんでした。

「経済的に豊かで教育熱心な親に、幼い頃から手をかけて育てられた子ども」たちは、中学受験の
ために小学校から夕食用の弁当を持って進学塾に通い、夜の10時か11時に帰宅するような生活を
していました。そうして、入学後にわずか12歳で「勉強したくない」「大人が大嫌い」と言い放
ち、教員に暴言を吐く。

かつての公立名門中学校を立て直すため、工藤先生が行ったのは「手をかけすぎる教育」から「手
をかけない教育」への大転換です。「当たり前」を見直す改革のひとつが、数学の時間に行った「教えな
い授業」でした。「教える授業＝一斉型板書授業」ではなく、教材は子どもの自主性に任せ、子ども

2. 現代における最先端の教育とは？

たち同士で相談しあったり、疑問があれば自分で先生に質問をするというやり方です。塾の問題集（宿題）を持ってくる子どももいれば、中1なのに中2・中3の数学の問題を解く子ども、理科の勉強を始める子どももいました。子ども自身が学び方を自由に選択していくのです。

工藤校長：中1から中3の3年間、「教えない授業」をしています。面白いのは、「教える授業」では質問もしなかったような生徒が疑問を解決するために自らアクションを起こすようになったことです。それを繰り返すことによって、自分の人生を自分で歩いていくための自律の力が身につけていきます。不思議なことに、「教えない授業」を受けた生徒は、勉強ができなくても「教え方が悪い先生のせいだ」とは一言も言わないですね。

工藤校長：同じ教材で一斉授業という同一性の教育とは真逆ですよ。そもそも学びの本質とは何かと考えた時に、本来は自ら学べる生徒を育てるのが教育なのに、いつの間にか、誰もが知識を与えてスキルを上げることが理想の教育のように錯覚してしまっています。

工藤校長：少子化の日本はわずかな人間で高齢化社会を支える国に変わらなければなりません。限られた時間で成果が上がるような社会構造にしていかなければいけないのに、世の中はそうならない。その象徴的な姿のひとつが小学生の塾通いだと思います。子どもはたくさんの課題を与えられ、それをこなすことに必死で、ひたすら受験テクニックを身につける。そして塾で習ってわかっているから学校の勉強はつまらないと言う。優先すべき最上位目標が分からなくなって、システムに人間を合わせようとしているのです。

工藤校長：僕の考えはすごくシンプルで、日本の教育システムがおかしいならば、システムを変えればいい。でも、幼い頃から刷り込まれた他律型、依存型の人間の集まりになっているから、何も変わらない。何かを得ようとしたら、何かを失うわけですが、その選択ができなければ変化も進歩も起こりません。公立の学校よりはるかにプロ意識があり、日本の経済を下支えしている民間の教育産業をきっちり学校の内部に入れながら融合していくような仕組みができれば、民間教育産業も益々栄えて、子どもたちの学び方改革にゆとりができる。そうして生まれた時間を使って、社会のいろいろなことが学べるような体制をオールジャパンでつくっていくべきだと思います。

工藤校長：日本の社会構造とそっくりな状況が学校教育の中であって、手をかけて手をかけて、自分で解決できない子どもを育ててしまっています。最近、幼稚園の子どもの諍いに、「暴行罪」と言い出す保護者までいます。おもちゃを取った取られたというたわいない諍いを繰り返しながら、子どもは大事な社会性を学んでいくはずなのに、そうした機会を大人が奪い取っているのです。

自分の居場所は自分でつくる！当事者意識を大切に

1940年創設の歴史をもつ横浜創英中学校・高等学校は、勉強も部活動にも熱心な文武両道で頑張っている学校です。2020年に校長着任以来、工藤先生は麴町中学と同様に「自律の力」を最上位目

2. 現代における最先端の教育とは？

標に据えて、2年がかりでカリキュラムを再編。今年度から、理数系科目を充実させた中高一貫6年制の「サイエンスコース」を新設するなど、さまざまな場面で変化が芽吹いています。

工藤校長：私立校には独自に積み上げてきた伝統があります。横浜創英も「きめ細やかで丁寧な教育」を謳った学校でした。そうした「手をかける教育」から「自律型」の学校への転換は、リーダーが「変われ」と言ってすぐ変わるものではありません。僕が着任してすぐに行ったのは、理事長とお話しを重ねて「智に優れ、徳高く、健やかに」という81年前につくられた校是に代えて、学校にとっての最上位目標を「個人と社会の Wellbeing」に定めたことでした。

そして対話によって教職員の共通認識を深めながら、建学の精神である「考えて行動できる人の育成」のために、生徒に身につけさせる3つのコンピテンシー「自律・対話・創造」を具体化してきました。

教職員には、①最上位目標は何か ②目的を見失ってはいないか ③ムダなものはないか という3つの視点で仕事に対する意識変革を促しました。これを繰り返すことで、以前はひとつの物事を決めるために2時間もかかっていた職員会議が15分で終わるようになりました。

校長の仕事はめざす方向性を指示すること。教員から提案されるアイデアが1cmでも同じ方向に前進するものであればYes、逆行するものであればNoと言うと宣言しています。そうやって方向づけをすることで、教員たちのアイデアが変化してきます。「教えない授業」「全員担任制」などはすでに横浜創英でも行なっていますが、麴町中学と同じことをやりたいわけではありません。試行錯誤するなかで、横浜創英に適したものを生み出していけばいいと思っています。工藤校長：我々がつくろうとしているのは、子どもが主体の学校です。子どもが学校運営にも主体的に意見を言い、自分たちの居場所を自分たちで変えられるんだと実感できるかどうか。保護者も巻き込みながら、当事者意識を一番大事にして進めていきたいと考えています。今風の言葉で言えば、「生徒エージェンシー」を大事にする学校ということでしょうか。

日本私立中学高等学校連合会会長 富士見丘中学高等学校校長・理事長 吉田晋 先生に聞く 日本の学校が向かうべき理想の教育・学校像とは

こうした教育における平等論の顕著な例に教科書の無償化があります。

吉田校長：義務教育課程では教科書は全員無料です。これからはデジタル教科書が出てくるわけですし、タブレットも全員無料で配布されるべきです。しかし現状としては、私立学校へ通う生徒の場合、行政と学校からの補助金があるにしても、パソコンやタブレットの費用はご家庭にご負担いただいています。

公立学校の場合は公費で運営している以上、決められたことしかできません。多様化する社会のなかで、不登校や様々な悩みを抱える生徒が続々と増えています。そうした子どもたちに対してどんなに税金を投入してもいいから、彼らを救うのが公の学校の仕事だと私は思っています。

2. 現代における最先端の教育とは？

そのように原点に立ち返ってみて文部科学省に伝えているのは、支援の必要な子どもたちの問題は、研究開発校である国立大学の附属中高が本来担うべきなのではということです。しかし現在の国立大学附属高校では、私立学校と同じような教育が行われていて、東大や京大への進学者が何人と競っている状況です。そこは研究開発校としてしっかり努力して、支援の研究を進めてくれれば、公立学校も私立学校も助かるのではないかと思います。

吉田校長：子どもたちが自分の才能や将来の夢、希望に合わせた学校選びをできるようになるといいと思っています。戦後にアメリカが行った日本の教育改革のおかげで、国公立の別学校は数えるほどしかありません。そのため男子だけ、女子だけの学校に行きたい子は私立に行かざるを得ません。しかし、私立でも公立でも、自らの希望に合わせて選択しやすいようになることがいちばんだと思います。

あわせてこれからの21世紀の教育は、各校が特色を出せるようになることが理想です。特に私立学校は、建学の精神をしっかりと打ち出せる教育をしていきたいと主張しています。

吉田先生は、教育課程に縛られている現状について、もう少しフレキシブルにしてほしいと訴えます。

吉田校長：例えば主要3教科に注力する、STEAM教育をしっかり行うなど、単位の枠に縛られるのではなく、学校独自のいろいろな教育をできればいいと思っています。

この学校は理科に、ここは英語に力を入れるとか、日本の歴史をもっと徹底的に知らせることが大事といったような編成ができれば、各校の独自性が出ると思うのです。加えて吉田先生は、「文科省は私立学校の存在を認め出しました」と話します。学校全体の中で高等学校は約30%、中学は12%ほど、小学校は2%程度の私立学校。

認めるとはどういうことなのでしょうか？

吉田校長：極端に申し上げれば、今の先進的な教育のほとんどを私立中高が先駆けて実践してきました。私立学校がやってきたことを公立学校が追従するという現象が続いています。そういう意味で文科省も私立学校を無視できないということがわかってきました。

実際に自身が私立学校出身者であったり、子どもを私立学校に通わせている官僚の方も多くいますから、私立学校の魅力も理解してくれています。ただし、私学の教育をそのまま公立学校で行うのは、やはり無理があるのではないのでしょうか。

例えば公立学校では、5年や10年経ったら自分の知っている先生は転勤して1人もいないということがありますが、私立学校の特徴のひとつに、卒業して何年経ってもそこに同じ先生がいるということがあるのです。

そういう学校のあり方自体も違っていただけですから、なんでも私立学校と一緒にしようというのは無理ですし、公立だからといってすべて無償でやるというわけにはいかないと思います。

第3章 教育の最先端の動き：授業・教師編

国際バカロレア（IB）プログラムは、国際的な教育課程であり、文部科学省もこのプログラムを推奨しています。国際バカロレア機構が提供するこのプログラムは、世界中の学校で実施されており、日本国内でも多くのインターナショナルスクールや一部の公立・私立学校で導入されています。

今までは「教師による一斉授業」

同じ教室で
集団行動が基本となる教室で

一定のレベルを想定した
質の高い授業展開

今まさに教育現場で革新的な変化が進行中です。長い間、日本の教室では、教師が前に立ち、生徒たちは一斉に同じ内容を学ぶ「一斉授業」が一般的でした。この伝統的な教育手法は、情報を一方向から伝達し生徒をそれをノートに書きとるという形式で、しばしば教育の「受け身」の姿勢を強化していました。しかし、時代は変わり、学習者の中心に子供たちを置く教育方針が注目され、それに伴い授業のスタイルも大きく変革しています。

学習指導要領の改訂により、現代の学校では、一方通行型の講義が生徒たちにとって魅力的でない、あるいは効果的でないことが明らかになり、これに対応する形で、教育現場はより生徒主体の学習アプローチにシフトしました。このアプローチでは、生徒たちが授業の進行や内容の決定に積極的に関与し、自らの学びの主導権を持つことが奨励されています。実際、この方式において生徒は単なる情報の受け手ではなく、批判的に考え、創造的に問題を解決し、同時にコミュニケーション能力を育てる役割を担います。

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

この新しい形の授業は、「探究学習」や「プロジェクトベースの学習」(PBL)など、様々な形態で展開されており、教師はそのプロセスをガイドする補助者としての役割を果たします。自身の興味や好奇心を追求することで、学びがより深まるだけでなく、子供たち自身が学ぶことの楽しさを実感する機会が増えているのです。

このような変革は、生徒にとってのみならず、教育を担う教師にとってもまた、新たな挑戦です。教師は、伝統的な「知識の伝達者」から「学習のファシリテーター」へとその役割が再定義されつつあります。これにより、教師自身もまた、常に新しい教育の方法や技術を学び、適応し続ける必要が出てきています。

現代の教育改革は、ただやり方を変えるだけでなく、子供たち一人一人が学びの中で能動的な役割を果たし、それぞれのポテンシャルを最大限に引き出すことを目的としています。授業が楽しいと感じることで、学ぶ意欲も自然と高まります。生徒たちが自ら学ぶ楽しさを見つけ出すことができる授業は、まさに教育の新時代を象徴しているのです。

主体

子供主体の授業へ

勉強が嫌いな
子ども…?



従来型の
一方通行型講義が
嫌いなだけで、
「授業が楽しい」と
感じると変わる!

(自修館中等教育学校・神奈川県)

「教えない授業」を実践する山本崇雄先生（横浜創英中学校高等学校）

「教えない授業」との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

(山本先生) 24年間公立の中学校や中高一貫校でアクティブラーニング型の授業はもともと実践していました。その時から成果はあげてきてはいたのですが、2011年の東日本大震災のときに大きく

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

変わりました。あの時から、子供たちの前から先生が急にいなくなるかもしれない、そうなったときに、自分がずっと引っ張っていくスタイルの授業に疑問を感じ、思い切って子供たちに活動のハンドルを渡していくようになったのがきっかけです。

周りの反応はどのようなものだったのでしょうか。

(山本先生) 「教えない授業」を始めたのが、一斉詰め込み型の授業が多い進学校だったので、生徒主体の授業でも進学実績を出せることなど理解が広がるのには時間がかかりました。保護者もご自身が経験していない授業私学の先生、授業の進化その背景スタイルだったので、生徒たちの「授業が楽しい」という声や自ら学んでいる姿を見て、徐々に安心・信頼が生まれていった感じです。

日本の教育が変わらなければいけなくなった流れのようなものはありますか。

(山本先生) もともと日本には、寺子屋という個別最適の学びが行われていた時代があり、今でも学び合ひであったり学びの共同体という実践が行われています。寺子屋時代の教育から、日本は人口がどんどん増えていって、誰かのコピーをすれば稼げたりとか、仕事として成り立ったりするような時代になりました。効率よく教えれば効率よく知識は身につくことは事実だと思うのですが、人口が減っていきっている中では、その手法だと新しいアイデアが生まれにくく、立ちいかなくなっているのは親も先生も実感していると思うのです。ですからもう一度立ち返り、本来行われていた寺子屋の手法・思想のような子どもたち主体の教育を取り戻したいという思いが強くなります。

教師

今までは指導書のとおり
計画を立て教える授業

TeachingからCoachingへ

子どもの主体的な学びの
伴走者へ

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

「教えない授業」を初体験の生徒を前にした場合、先生が最初にかける言葉は何でしょうか。

(山本先生) 公立で教えていたときは、「できない」を「できる」経験をさせるというのが掴みではあったのですが、これまで様々な学校で教えていくうちに、勉強をしたいとかできるようになりたいというマインドセットができていない子もたくさんいたわけです。中には受験に失敗して自己肯定感をものすごく失ってしまっている子どもたちもいる、その子たちに「これはわかるようになったよね」という授業が必ずしも良いことではないということをご数年すごく感じていて、現在授業で最初にするのは「メタ認知をする」、自分の今をメタ認知してありのままを受け入れる、できないことも含めて自分の可能性として感じていけるように、心理的安全性の高い教室にしていくことを一番大事にしていて、できないことって悪いことじゃないよねっていう感じからスタートし、そこから目標設定、どんな自分になりたいのか、スタート地点と目指すところをどういうふうにしていくのかといった声かけをしていきます。

生徒主体にしていると、時間がかかったり、人手が必要になってきたりする心配があるのですが、そのバランスはどのように考えられているのでしょうか。

(山本先生) 先生を主語にすると、1年生の1学期のうちにここまで進まないといけないとか、これを教えないといけないとか、そういうことが出てくると思うのですがけれども、あくまで私は生徒を主語にして、生徒が1学期にどこまで学びたいかという仕掛けを作ることが大事だと思うのです。私の場合、1年間でこれだけのことを学ぶよということを最初に見せて、そこから学び方というものと一緒に体験しながら、どういうトレーニングが必要なのかというのを見ていくと、複数の手法がわかり、その中から選択することができるので、いつまでにこの量をやらなければいけないという課題になるとそれはタイムマネジメントだったり、自己の感情のコントロールだったり、ということになってきます。

学習指導要領があって検定教科書があり、私は基本的に検定教科書をベースにしているので、1年生ではこの量を学ぶことになっているということを見せ、「これをどう学ぶ？」というのを生徒たちに預けて、生徒たちに「どうしたい？」ということを常に確認し続けます。先生に教わらないと進まないではなくて、むしろ空いている時間があったりだとか、先生が休みになってしまったりした時だとかは、そこを自己調整する時間だというように生徒たちに理解させていく、生徒たちも試行錯誤をしながら、失敗をしながら自分をコントロールするということをしていくことが大事なのかなと思うのです。

先生との連携に関しても、私は教えることを否定しているわけではありません、一斉授業も必要だとは思っています。いろいろな強みを持っている先生方がいて、生徒たちがいろいろな学び方を選べるようになっていくといいかなと思うんですね。自分をコントロールしたり自分でマネジメントしていくというやり方を体感できればそれが他の授業にも応用できるようになると思います。なので隣の先生に教えない授業やろうよと強いることはしなくて、例えばその先生が教えるのが上手でスキルがある先生だったらそれを活かすべきだと思うのです。全ての先生がスーパーティーチャーになる必要

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

はないし、全ての先生が教えない授業をする必要もありません。学校のチームとしていろいろな先生の特性が活かされ、バランスをとっていくことが大事だと思います。

アクティブラーニングとかPBLとかは、聞くことはあっても実はよく知らない人も多いと思います。その中で、保護者はどう動いて判断していけばよいのでしょうか。

(山本先生) 学習指導要領は10年ごとに改訂されています。でも、自分のお子様の学校の授業参観に行くと、授業自体はそんなに変わっていないことに気づくと思います。それは、先生は指導要領に縛られず、かなり自由に授業ができてしまうからです。これまでの「大人しく座っている」「先生の話の話を聞いている」「わかりやすい板書で説明もわかりやすい」といった教師がコントロールした「落ち着いた」授業が必ずしもいい授業とは限りません。授業を見学される時、生徒に主体的な学びが起きているか、対話があるか、テクノロジーは活用されているかと言った観点で見学することも大切です。

こういった、これからの教育のあり方については親も学んでいき、既存の意識を変える必要があると思います。そしてそれを声に出すのです。例えば三者面談の時に「ICTをもっと取り入れてほしい」とか、「iPadを使った授業でこんなに成長することができた」とか、意見や要望を言うか言わないかって凄く大きいのです。そういう声が広がっていくことは教育を変える上ですごく大事だと思っています。何かトラブルがあったときにだけ先生と話すのではなく、教育方法や学校の授業のあり方などについてももう少し話してもいいのではないかと思います。遠慮されたり、これは言ってもしょうがないって思いこんでしまう部分もあると思いますし、自分ひとりが言ったところで変わらないと思うかもしれないですけども、実はそのひとりの声でハッとすることってというのは結構あるのです。そういうところから動いていかればよいと思います。

探究授業

最近の教育改革により、学校での授業が大きく変わりつつあります。これまでの受け身の学びから、生徒が主体的に参加する「探究授業」が増えてきています。この新しい授業形式では、生徒たちは自分で問題を見つけ、解決策を考えながら学ぶため、思考力や創造力を育てることができます。また、学ぶ意欲も自然に高まります。

教師にとっても、探究授業は大きなチャンスです。生徒一人ひとりの興味や学び方に合わせて授業を工夫することで、クラス全体がより活動的になり、生徒とのコミュニケーションも深まります。これによって、生徒からの反応を受けてすぐに授業方法を改善するなど、より効果的な教え方を身につけることができます。

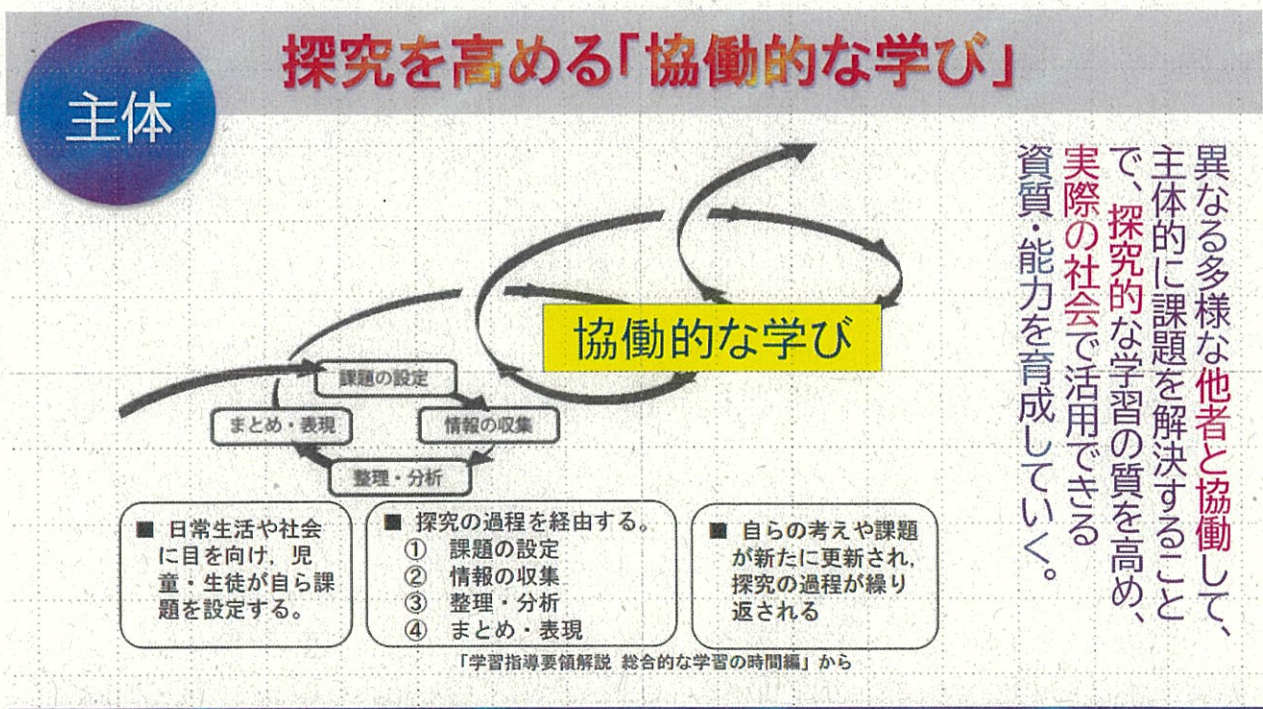
このように、探究授業の導入は、生徒が今後社会で生きていく上で必要な自主性や問題解決力を培うための重要なステップです。教育がこのように変わることで、日本の学校はもっと生徒の可能性を

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

引き出し、個々の才能を伸ばす場となるでしょう。この変化は、生徒たちが将来、多様な状況に柔軟に対応できるようサポートするために非常に有益です。く座っている」「先生の話をしている」

「わかりやすい板書で説明もわかりやすい」といった教師がコントロールした「落ち着いた」授業が必ずしもいい授業とは限りません。授業を見学される時、生徒に主体的な学びが起きているか、対話があるか、テクノロジーは活用されているかと言った観点で見学することも大切です。こういった、これからの教育のあり方については親も学んでいき、既存の意識を変える必要があると思います。そしてそれを声に出すのです。

例えば三者面談の時に「ICT をもっと取り入れてほしい」とか、「iPad を使った授業でこんなに成長することができた」とか、意見や要望を言うか言わないかって凄く大きいのです。そういう声が増えていくことは教育を変える上ですごく大事だと思っています。何かトラブルがあったときにだけ先生と話すのではなく、教育方法や学校の授業のあり方などについてももう少し話してもいいのではないかと思います。遠慮されたり、これは言ってもしょうがないって思いこんでしまう部分もあると思いますし、自分ひとりが言ったところで変わらないと思うかもしれないですけども、実はそのひとりの声でハッとすることってというのは結構あるのです。そういうところから動いていければいいと思います。



和洋九段女子では、21世紀型教育を推進し、すでに独自のPBL授業を全学年全教科で開始しています。もちろん、授業のみならず、国内外の研修旅行及び多様なプロジェクト活動でもPBLが行われています。

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

しかも、一早く SDGs の探究に生徒を導きました。中1、中2 では、SDGs の取り組みをしている企業や国連広報センターなどの各団体に取材にいくところから始まりました。ところが、中3 になると、SDGs を知るだけでなく、多くの人に広げ、プロモーションするためのプロジェクトに変容していきました。ボードゲームである「SDGs すごろく」が創出されるまでに到ったのです。

生徒たちが team ami を結成し、このような活動をしたのは、まさにアントレプレナーシップの発露でした。その証拠に、その活動は「SDGs 探究 AWARDS 2019」中高生部門で優秀賞獲得として結実したのです。

この賞を受賞した時に、team ami のメンバーは次のようにコメントしています。

この SDGs すごろくは多くの人に SDGs のことを知ってもらうための目的として作成しました。「だれ一人取り残さない」をこのゲームのコンセプトにして、多くの人に世界の様々な問題を「自分ごと」として捉えてもらうためには、「楽しいゲーム」であることが必要だと考えました。

しかし、ただ楽しいだけのゲームとして終わらせないための工夫を、随所に入れました。例えば、このゲームは SDGs の 17 の目標を集めることを目的としていますが、ただ、マスに止まって目標をもらえるだけではなく、16 番の目標をもらえるマスでは、プレイヤー同士が握手をするアクションも取り入れました。

また、ゲームの最後には、振り返りの時間を作りました。集めた目標によって、自分の国がどうなったかを発表してもらうことによって、世界にはいろいろな国があり、自分の国には何が欠けているのか、また、より良くするためにはどのようなアクション（行動）が必要なのかを、意識してもらうことを大事にしました。

個別最適な学び

日本と海外の教育の違い、特に日本語能力の重要性を理解するため、啓明学園では「取り出し授業」を実施しています。この授業は単なる習熟度別授業ではなく、難しさを感じる生徒に個別指導や少人数クラスで学習を進める機会を提供しています。さらに、異なる学年の生徒と一緒に学ぶこのシステムは、海外の進歩的学校の「個別授業」に類似しており、各生徒のレベルに合わせたカスタマイズされたテストも実施されています。このクラスでは、国語と数学の学習のほか、英語と日本語が自然に使用されるリラックスした環境が提供されています。この教育形式は、特に日本の国際スクール出身者に多く、学習言語の違いがあるため実生活と知的活動の統合に苦勞する生徒にも適しています。

文部科学省ではこのような個別最適な学びを協働的な学びとともに 2030 年の SDGs 達成年度に向けて一般の学校にも導入できるように検討しています。

個別最適な学び

主体

帰国生が多い学校では、主要教科で「取り出し授業」で個別指導する

子供の理解度や
認知の特性に応じて
自分のペースで学ぶ

単なる習熟度別授業ではない。
授業についていくのが難しい生徒たちは、「取り出し授業用の教室」に来て、個別指導の形や少人数クラスのなかで、それぞれのレベルとペースで学習を進める。

(啓明学園中学校高等学校・東京都)

通信制高校の生徒数

年度	生徒数(公立)	生徒数(私立)	生徒数(公立+私立)
S45	9.5	5.0	14.5
S50	9.5	4.5	14.0
S55	8.5	3.5	12.0
S60	8.5	4.5	13.0
H2	9.5	6.5	16.0
H7	9.5	5.5	15.0
H12	10.5	7.5	18.0
H17	9.5	8.5	18.0
H22	10.0	8.5	18.5
H27	11.0	6.5	17.5
R2	15.0	5.5	206,948

通信教育の方法

**面接指導
(スクーリング)**

教師から生徒への対面指導、生徒同士の関わり合い等を通して、個々の生徒の持つ学習上の課題を考慮した個人差に応ずる指導を実施

添削指導

生徒が提出するレポートを教師が添削し、生徒に返送することにより指導を実施

試験

添削指導・面接指導等による指導を踏まえ、個々の生徒の学習状況等を評価

+

多様なメディアを利用した指導

ラジオ・テレビ放送やインターネット等を利用して学習し、報告課題の作成等を通して指導を実施

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

通信制の学校

通信制高校の生徒数が増加している背景には、個々の学習ニーズへの柔軟な対応、先進テクノロジーの活用、学習の自由度、心理的負担の軽減、進学や仕事との両立が容易な点など、様々な要因があります。これらの学校は、多様な生活環境や学習スタイルを持つ生徒にとって、自分自身のペースで学び、成長する機会を提供しています。

近年、日本において通信制高校に通う生徒の数が増加している主要な要因は以下のように多岐にわたります。

1. 多様な学習ニーズへの対応

通信制高校は、さまざまな学習スタイルや生活状況を持つ生徒に対応できる柔軟な教育形態を提供します。例えば、病気や障害を持つ生徒、スポーツや芸術で特技を伸ばすために時間が必要な生徒、地理的な制約で通学が難しい生徒などが、自分のペースで学習を進めることが可能です。

2. テクノロジーの進展

インターネットとデジタルテクノロジーの発展により、オンラインでの授業提供が向上しました。これにより、教育の質が向上しており、これまで以上に多くの生徒が通信教育を受ける選択肢を選ぶようになってきました。ビデオ授業、リアルタイムのオンラインクラス、インタラクティブな学習プラットフォームなどが利用されています。

3. 教育への取り組みの自由度

通信制高校は自宅学習を基本としており、生徒に自由度が高い教育環境を提供します。これにより、生徒は自分の学習計画を自由に立て、個人の興味や必要に応じて学習内容を選択できるため、自主性や自己管理能力を育成することが可能になります。

4. 心理的な負担の軽減

学校生活での対人関係や学校環境にストレスを感じる生徒もいます。通信制高校はこうした環境からの心理的プレッシャーを軽減し、学びに集中できる環境を提供するため、選ばれることがあります。

5. 進学との両立

職業訓練や他の教育機関での学習と高校教育を両立させたい生徒にとって、通信制高校は非常に適しています。経済的な理由で働きながら学びたい生徒にも適した選択肢です。

以上の理由により、通信制高校は多くの生徒にとって魅力的な選択肢であり、その人気が増す一因となっています。この教育形態が提供する柔軟性と多様性は、生徒一人ひとりの個別のニーズに応じて教育機会を提供することを可能にし、教育の機会均等を推進しています。

空間

N高・S高合計
生徒数
27,712人
2023年12月末時点

教室以外の選択肢

教室になじめない
子供が教室以外
の空間でも

既存の通信制の学校の枠を超える N 高等学校・S 高等学校

近年、教育の多様化が進み、伝統的な学校の枠に収まらない新しいタイプの教育機関、「N 高等学校・S 高等学校」が注目を集めています。これらの学校は、従来の通信制の学校の枠を超えて、特に自由度の高い学習スタイルや先進的な教育テクノロジーの利用により、多くの生徒にとって魅力的な選択肢となっています。これらの学校のメリットとデメリットを上げていると下記ようになります。

メリット

1. 柔軟な学習環境

オンラインとオンキャンパスのクラスを組み合わせることで、どこにいても、いつでも学習が可能です。これにより、部活動、趣味、アルバイトなど他の活動と並行して学ぶことができます。

2. 先進技術の活用

AI や VR などの最新技術を取り入れた授業を実施しており、生徒はこれらのツールを使用して、実世界で役立つ技術的なスキルを身に付けることができます。

3. 自主学習の奨励

生徒一人ひとりが自分自身の学習プランを立て、管理することを奨励しており、これにより自己管理能力や主体性が育まれます。

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

デメリット

1. 自己管理の課題

柔軟な学習環境は高い自己管理能力を要求されるため、計画性がないと学習が遅れがちになる可能性があります。

2. 対面の交流が少ない

オンラインでの学習が主体のため、対面での交流の機会が減少し、それによるコミュニケーションスキルの発達に課題が生じる場合があります。

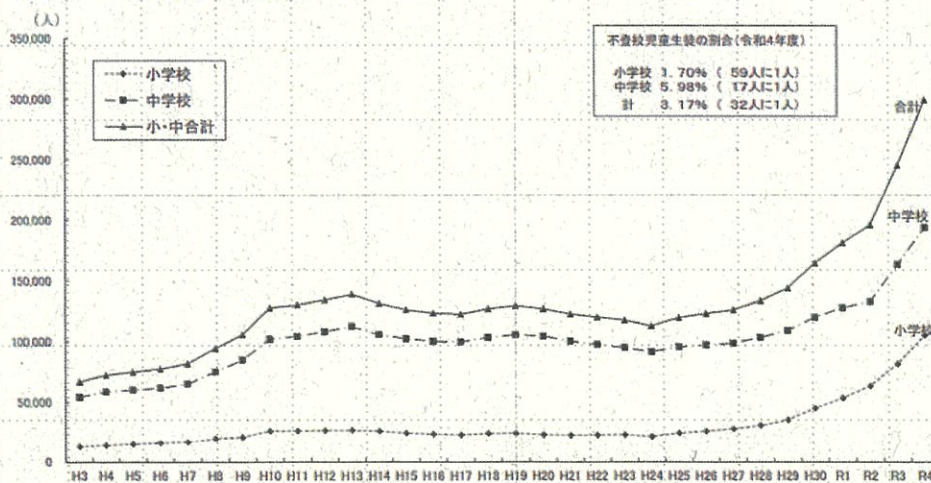
3. 体育や実験などの活動制限

物理的な学校設備が限られているため、スポーツや科学実験など、実際に物理的な空間で行う活動の機会が限定的です。

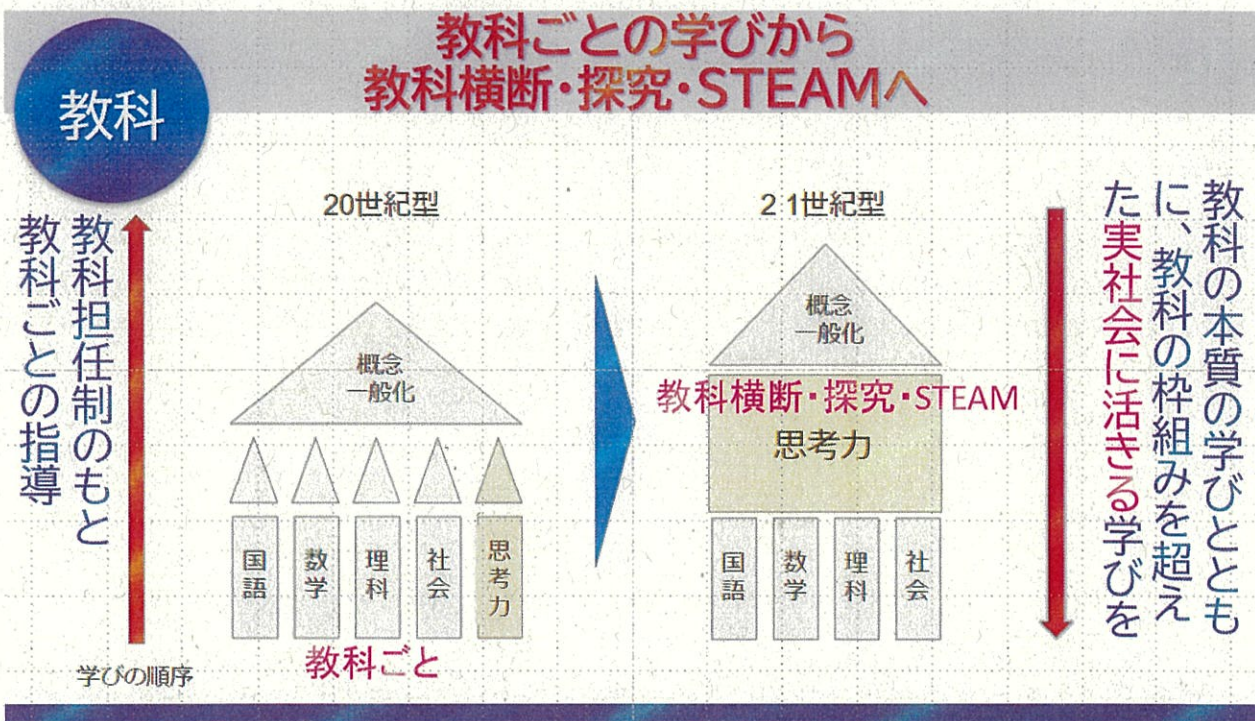
N高等学校とS高等学校は、革新的な教育手法を実践しながら、一部の課題も抱えています。これらの学校を選択する際には、生徒の個性や学習スタイルを考慮し、家庭でのサポート体制を整えることが重要です。プラス面とマイナス面をしっかりと理解し、生徒一人ひとりに最適な教育環境を選ぶことが求められます。

不登校児童生徒数の推移グラフ

<参考2> 不登校児童生徒数の推移のグラフ



令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
令和5年10月4日(水)
文部科学省初等中等教育局児童生徒課



同質・均質な集団から 多様な人材・協働体制へ

教職員

トラブルなども小さなうちに対処したり、話しやすい先生を選んで面談したりすることも可能になります。
男女や年齢構成、教科バランスを考えて配置しているため、学習サポートや進路の相談も安心です。

複数の担任が多角的な視点で生徒を見守る

（佼成学園女子中学校高等学校 東京都）

全学年「チーム担任制」
2020年度より固定担任制を廃止し、
中高6学年で「チーム担任制」

チーム担任制（佼成学園女子中学校高等学校）

3. 教育の最先端の動き：授業・教師編

チーム担任制を導入する目的と、導入後の変化について教えてください。

学校長は、21世紀型教育の根幹には英語教育や探究型学習だけでなく、「人間力」の育成が必要だと強調しています。校長が提唱する国際社会での平和構築を目指す教育理念に基づき、共感や協働の重要性を生徒に伝えています。本校では、異文化理解やグローバル教育、多様性の尊重も教育のキーワードとなっております。

チーム担任制では、生徒が固定の担任から複数の教員の価値観や方法を学びます。これにより、生徒の世界観や価値観が広がり、思春期の女子生徒にとっては悩みや不安を相談しやすい環境が整います。また、クラス運営でも、異なるキャラクターの教員が協働することで、生徒たちには様々な角度からのサポートを提供できるようになります。

この制度により、教員間での情報共有が活発になり、教職員もまた成長する機会が増えました。生徒も教員も、異なる視点を学び、互いに成長を支え合う文化が根付いています。

今後もこのような教育活動を続け、生徒たちが自信を持って挑戦し続けることができるよう支援していきたいと考えています。

教職員

チーム担任制

個別のサポートの強化

複数の担任がいることで、生徒一人ひとりへのサポートが手厚くなります。学習上の問題だけでなく、心の問題にも柔軟に対応できるようになる。

教員の専門性の活用

教員ごとに専門分野や得意分野が異なるため、チーム担任制を利用することで、それぞれの専門性を生かした授業や指導が可能になる。

負担の軽減

教員一人ひとりの負担が軽減され、燃え尽き症候群(バーンアウト)のリスクを減らします。また、教員同士で情報共有やアイデアの交換が行われることで、質の高い教育が実現しやすくなる。

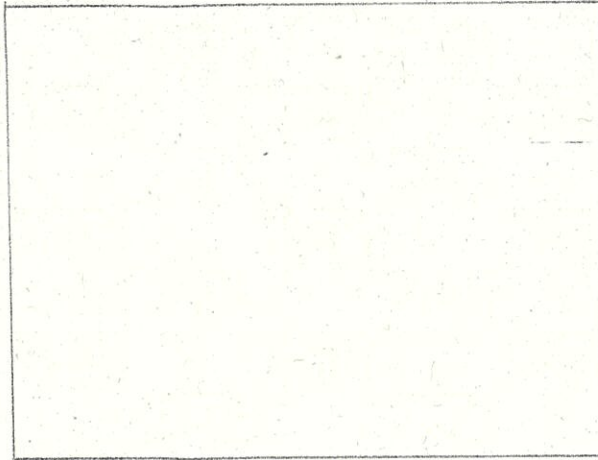
多角的な関係性の構築

生徒は複数の教員と深い関係を築くことができ、さまざまな大人とコミュニケーションを取る力を養うことができる。

教職員

同質・均質な集団から
多様な人材・協働体制へ

今までは教員養成学部等を卒業し、定年まで勤めることが基本、万能を求められる教師



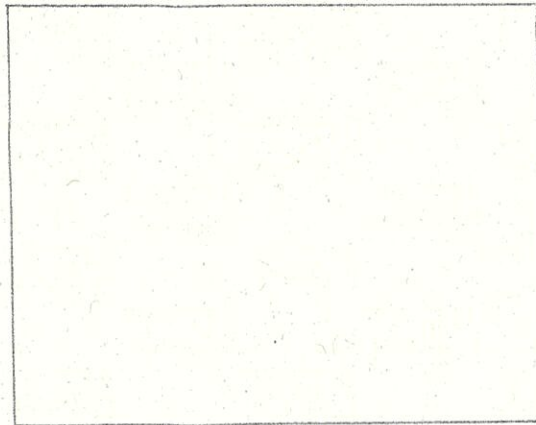
教職員は、多様なバックグラウンドの魅力的な人間が集まるダイバーシティなチームです。

(新渡戸文化学園中学校高等学校)

教職員

同質・均質な集団から
多様な人材・協働体制へ

多様な教職員集団、理数、発達障害、ICT、キャリアなど、専門性を活かした協働体制



さまざまな経歴と経験・を魅力的な人材が揃っていて、教職員の副業も歓迎も歓迎。教員は自らの知見を広く世に伝え、日本の教育全体をより良くすることを目指している。

(新渡戸文化学園中学校高等学校)